

## 「河上肇の沖縄への影響」

三 田 剛 史

### 概 要

1911年4月、河上肇は地割制度調査のため沖縄本島におもむいた。4月3日、河上肇は那覇市青年会の要請によって、「新時代来る」と題した講演を行った。その講演の、琉球は日本本土とは異質であると指摘したくだりが『琉球新報』などの攻撃を受け、「河上肇舌禍事件」とよばれる河上肇自身の予期せぬ沖縄の思想史上の一大事件を惹起した。現代にも問題を投げかけているこの事件は、本土との同化を主張する沖縄の大勢によって河上肇が攻撃された事件とされてきた。ところが、『沖縄毎日新聞』は河上肇擁護の旗幟を鮮明にしている。のみならず、同紙の論調には、河上肇の説く独特の唯物史観や国家論が顕著に反映されている。本稿では、河上肇の琉球調査の成果を概観しつつ、『沖縄毎日新聞』の主張に河上肇がいかなる思想的影響を与えたかを解明する。

### 一、河上肇の琉球調査行

京都帝国大学助教授河上肇は、琉球<sup>(1)</sup>における地割制度<sup>(2)</sup>の調査のため、1911年3月26日神戸を船で発ち琉球に向かった。この調査旅行では、沖縄県庁などにおいての文書の調査とともに、実地調査が予定されていた。当初4月2日から2週間を予定していた調査は、「舌禍事件」のため一週間で切り上げて、4月8日には帰洛せざるをえなくなった。そのため、琉球における河上肇の実地調査は、不満足なものに終

わった。調査が不十分であったため、この琉球の地割制度に関する研究成果はなかなか発表されなかった。

1914年によりやく短い論文「琉球地割制度ノ一端」<sup>(3)</sup>が著され、1911年の地割調査の成果が公刊された。「琉球地割制度ノ一端」は、「地割ノ期限」、「地割ノ単位」及び「地割ノ方法」の三節からなっている。「地割ノ期限」においては、琉球での地割の期限が1年から50年まで様々あり、間切<sup>(4)</sup>や村ごとに、またその土地の作物によって、一様でないことを述べている。

(1) 河上肇が訪問した1911年当時、琉球王国の版図はすでに「沖縄県」として日本の統治下に組み込まれていた。しかし、河上肇が探求したのはそこに本来存在していた「琉球」の社会の姿であり、日本国の一部としての「沖縄県」ではなかったと考えられる。河上肇は後述の論文で、単に地理的地域を示す地名としても「沖縄」ではなく「琉球」を用いている。本稿では、河上肇の研究対象としての沖縄を指す場合は、「沖縄」ではなく「琉球」を用いる。

(2) 琉球王国時代から続いていた地割制度は、1903年前後に廃止され本土より約30年遅れて地租改正が行われた。この間、明治政府は地割制度の存在を理由に沖縄県に他府県なみの地方制度を施行することをせず、個々人の参政権も認めなかった。(大田昌秀『新版 沖縄の民衆意識』新泉社、1995年、67-85頁。)

(3) 『和田垣教授在職二十五年記念経済論叢』、1914年11月。

(4) 琉球王国時代の行政単位で、現在の市町村に相当する単位。

「地割ノ期限」は、仲吉朝助<sup>(5)</sup>の稿本『島尻郡地割』、及び沖縄県庁に残る地割関係の文書にもとづいてまとめられた。地割の単位や地割の方法についても、「各間切各村ニ依リテ同ジカラ」ずとして、仲吉朝助の稿本からいくつかの例を示すにとどまっている。

河上肇は、琉球の地割制度を調査するために琉球におもむいたのであるが、伊波普猷の導きにより、糸満では思いも寄らぬ発見をすることになった。論文「琉球糸満の個人主義的家族」<sup>(6)</sup>の冒頭には、

「抑々余の琉球に遊ぶや、其目的初めよりして、地割てふ共產主義的制度の研究に在りしに、計らずも、之と正反対の性質を有すとも云ふべき糸満の個人主義的家族を見るを得たるは、深山の宝意なくして之を拾ひしの類、此行の副産物としては、自ら価値の余りに大なるを覚ゆ。」<sup>(7)</sup>

と述べられている。「琉球糸満の個人主義的家族」の構成は次の通りである。

#### 「一 序言

#### 二 糸満の農業及び魚類の販売

#### 三 家族各自の特有財産

#### 四 其他の社会的自然的特徴

#### 五 個人主義的家族の起源に関する仏国社会学者の一説

#### 六 那威西岸の地理的条件

#### 七 那威西岸の漁民間に於ける個人主義的家族の発生

#### 八 糸満の個人主義的家族の起源

#### 九 補言」

では、この論文の内容を概観しておく。糸満の個人主義的家族については、第二節で「此の糸満の最大特徴は、其家族経済が極端なる個人主義に依れる事也。現に夫婦親子は多くは各々其の財産を別にす。」<sup>(8)</sup>と端的に述べられている。糸満は漁村であり、漁業に従事する男子と、魚類を販売する商業に従事する女子の役割がはっきりと分離していた。未婚男子の獲物は妹が買い取り、既婚男子の獲物は妻が買い取って、那覇の市場で販売される。妹なり妻なりに販売した魚の代金が男子の収入となり、兄なり夫から買い取った魚の値段と那覇で販売した金額との差が女子の収入となっていた。夫婦は基本的に各々独立した財産を所有するが、夫婦に子が産まれたときに初めて二人の財産を合併した。もっとも、子が成長して収入を得るようになると子の財産は親夫婦から独立する。兄弟親戚間での経済的助力は、資金の貸付のみにより、「兄弟でも金はくれぬ」という意味の土地のことわざも存在した<sup>(9)</sup>。

第四節では、琉球において糸満人が特異な地位を占めていることにふれている。糸満は漁業で生計を図る地域であるが、琉球において漁業に従事しているのは糸満人だけであった。しか

(5) 高良倉吉「河上肇と沖縄地割制研究」(『河上肇社会問題研究復刻版第6巻月報』、1975年4月)によると、仲吉朝助は後に論文「琉球の地割制度」(『史学雑誌』、1928年)を著し、地割制研究に大きな足跡を残した人物である。「琉球糸満の個人主義的家族」の序章で河上肇が謝辞を述べている仲吉農工銀行頭取とは、この仲吉朝助のことである。

(6) 初出、『京都法学会雑誌』6巻9号、1911年9月。後、『経済学研究』(博文館、1912年6月)所収。

(7) 「第十章 琉球糸満の個人主義的家族」『経済学研究』(初出『京都法学会雑誌』6巻9号、1911年9月)博文館、1912年6月(『河上肇全集』6所収)、317頁。

(8) 前掲書、318頁。

(9) 前掲書、321頁。

も、本土にくらべて当時の琉球の生活水準はかなり低く、例えば那覇の人々の主食は甘藷や豆腐の類であり、米や肉は上流階級のものであった。ところが、糸満だけは、琉球において抜きん出た経済力を有していた<sup>10</sup>。糸満では、普通の住民が米と肉を三食ともに用い、地価も高く住民の家屋も那覇などにくらべてはるかに立派であった<sup>11</sup>。

糸満社会だけがなぜ個人主義的家族を有するに至ったのかについて、三方を山に囲まれて一方が海に面した狭く閉鎖的な地形が、糸満を他の諸地方と隔離孤立させたからであると、河上肇は考えた<sup>12</sup>。

京都に帰った河上肇は、同僚の米田庄太郎の教示により、ル・プレー派の社会学者の著作を繙き、ノルウェー沿岸の漁民を個人主義的家族の淵源となす学説を知った。その学説については、以下のように第五節から七節にまとめられている。スカンジナビア半島の肥沃な東側に住んでいたゴート人の一部が半島西側に移住したことで、個人主義的社会形態が発生した。元来家長権の強い共同的家族をもつゴート人の中から、土地の痩せたノルウェーに移住した者は、そもそも独立心と個人主義的傾向の強い人々であった。岩山が海岸まで迫るスカンジナビア西岸ノルウェーの地形は、土地に根づいて大家族を形成するには全く不向きであった。そこで、ノルウェーに移住したゴート人は、個人主義的家族を形成していった。現在個人主義的社会形態を有する人種は、すべてその淵源をスカンジ

ナビア西岸にもっている<sup>13</sup>。

河上肇は、個人主義的家族を有する人種がすべてスカンジナビア西岸に淵源をもつとの見解には賛同しかねているが、ノルウェー西岸と糸満の環境の類似に注目している。つまり、どちらも農業に適した土地が狭小でなおかつ海に面しており、生活を漁業に依存しなければならなかった。これは大家族で農業が運営される農村とちがって、個人主義的家族を発生させやすい。糸満の場合は、漁撈と販売の男女分業がはっきりし、那覇との交易が近年活発化したことで、個人主義的家族の形成をさらに促進したと、河上肇は考えた<sup>14</sup>。

既に当時の河上肇は、唯物史観を歴史分析のための有力な手がかりと考えていた。唯物史観に基づいて人類原初の歴史を考察した『人類原始ノ生活』は1909年に著され、19世紀以来の人類史を扱った『時勢ノ変』は琉球訪問の直前1911年3月に公刊された。それら二著に現れた唯物史観は、原始においては人類は家族を単位として生活し、経済的条件によって社会制度が変動していくというものであった。「琉球糸満の個人主義的家族」も、個人主義的家族の発生原因を経済的要因に求めていることから、当時の河上肇の唯物史観理解を反映している。

河上肇は、「琉球糸満の個人主義的家族」を次のように締めくくっている。

「余の琉球に遊ぶや、当時余は需によりて一席の講演を試み、論を結ぶに当り、琉球人に望む

<sup>10</sup> 糸満が裕福であった原因の一つとして、日清戦争後の魚類の価格騰貴も挙げられると河上肇は考えている。

<sup>11</sup> 「第十章 琉球糸満の個人主義的家族」『経済学研究』(初出『京都法学会雑誌』6巻9号、1911年9月)博文館、1912年6月(『河上肇全集』6所収)、322頁。

<sup>12</sup> 前掲書、324頁。

<sup>13</sup> 前掲書、324-330頁。

<sup>14</sup> 前掲書、332-333頁。

にその特質の発揮を以てしたりしに、当時一部の人士は誤解に次ぐに曲解を以てし、攻撃に次ぐに侮辱を以てしたりしかど、見よや、琉球の天地、既に這個特異の一現象あり、若し研究調査を重ねれば猶ほ考ふべきもの極めて多からん。帝国南端の孤島、特殊の歴史を有し特殊の地理を有する既に久く、山水の色、草木の色、亦た頗る内地と同からず、況んや文物制度習慣思想の如き豈に尽く内地と同きの理あらんや。若し夫れ世上、此の特異を呪ふ者の如きあらば、吾人は今も猶ほこれを非とするに躊躇せざるもの也。」<sup>159</sup>

では、「誤解」、「曲解」、「攻撃」、「侮辱」を招いた「一席の講演」とはいかなるものだったのであろうか。

## 二. 舌禍事件

河上肇は琉球に到着して間もない1911年4月3日、沖縄県教育会の要請により松山尋常小学校で<sup>160</sup>講演を行った。河上肇自身によるこの講演の原稿は残されていないが、『沖縄毎日新聞』1911年4月5・6・7日<sup>161</sup>に連載された「新時代来る一河上學士講話大要」<sup>162</sup>、及び『琉球新報』1911年4月5日掲載の「新時代来る河上法學士講要項」によって、その内容を知ることができる。それは、次のようなものである。

人類は地球上の動物の中でもっとも支配的な地位を占めている。なぜなら、人類は道具を使用することにおいて、他の動物と一線を画し、

道具の使用によって文明を発達させえたからである。道具を複雑にした機械が近年大発展し、18世紀には英国を中心として「産業界に大変動を起こし引いて社会革命とな」<sup>163</sup>った。工業の発展に伴って分業が進み、自足経済は崩壊して営利経済の時代となりつつある。営利経済の時代になれば、貧富の懸隔もうまれ、そのため社会主義思想も台頭してくる。しかし、科学の進歩は今日著しく、科学の進歩は思想界の進歩も促しており、いよいよ新人による新時代建設の機が熟すのである。

『沖縄毎日新聞』と『琉球新報』では、掲載されたこの講演の内容に差がある。『沖縄毎日新聞』は、連載で講演の内容を詳しく伝えているが、4月7日の3回目で（未完）のまま連載がうち切られた。ただ、この3回分ではほぼ上述の内容を尽くしており、最後の部分だけが省かれている。『琉球新報』は、4月5日の一面に、おそらく講演全体を要約して掲載した。そして、『沖縄毎日新聞』では省略された講演の最後の一節に、『琉球新報』は激越な攻撃を加えた。その一節を『琉球新報』から引用しておく。

「余侑ら沖縄を観察するに沖縄は言語、風俗、習慣、信仰、思想□他あらゆる点に於て内地と□歴史を異にするが如し而して或は沖縄人を以て忠君愛国の思想に乏しと云ふ然れどもこは決して歎ず可きにあらず余はこれ在るが爲めに却つて沖縄人に期待する所大なると全時に又最も興味多く□□るものなり…（中略）…過去の歴

<sup>159</sup> 前掲書、333頁。

<sup>160</sup> 『琉球新報』1911年4月2・3日掲載の予告による。なお、本稿のために参照した『琉球新報』と『沖縄毎日新聞』は、早稲田大学中央図書館所蔵マイクロフィルムである。

<sup>161</sup> 講演が行われたのは4月3日の午後であったが、この日は神武天皇祭のため翌4日が新聞休刊となり、講演の記事は両紙とも5日に掲載された。

<sup>162</sup> これは『河上肇全集』5（岩波書店、1983年5月）の「別篇」に所収された。

<sup>163</sup> 「新時代来る一河上學士講話大要」『沖縄毎日新聞』1911年4月6日（『河上肇全集』5所収）、481頁。

史に就て見るに時代を支配する偉人は多くは国家的結合の薄弱なる所より生ずるの例にて基督の猶太に於ける、釈迦の印度に於ける何れも亡國が生み出したる千古の偉人にあらずや若し猶太印度□し□亡國にあらずんば彼らは遂に□れざるなりゆえに假令ひ本縣に忠君愛國の思想は薄弱なりとするも現□新□物を要す□新時代に於て余は本縣人士の中より他日新時代を支配する偉人豪傑の起らん事を深く期待し且つ之に對して特に多大□興味を感じずんばあらざるなり(完)」<sup>20</sup>

『琉球新報』はこの講演録を一面に掲載したが、それに先立ち一面トップには「旅行家の本縣評」と題する批判文を配した。

「演説の大旨、必ずしも批評の限りにあらずとするも、其餘談とも云ふべき末節に至りて、此の人端なくも胸中畜ふる所を披瀝して一部琉球觀とも云ふべき言論を弄したり、而かも其の言ふ所の何なるやを聴くに、別項記載の如く、事項一つならざるも本縣民をさして、忠君愛國の誠□缺たるを云々し、更らに進んでは猶太、印度の亡國民の其の如くに評下し去て顧慮するなきに至りては、吾等沖縄縣民の身にとりて、面狀三斗の痰を吐き懸けられたる如き感あり、甚だ以て聴き捨てならぬ言葉なりとす……氏の我が沖縄縣民を印度人、猶太人の亡國的運命に比し、慰藉せんと欲するが如きもこれ我が沖縄縣民を待遇するに世界の劣等民族を以てせんとするものにして、取も直さず縣民に對する大な

る侮辱なりとす、我等は沖縄縣民にして日本帝國の地方民なり…」<sup>21</sup>

つまり、『琉球新報』による河上肇の講演の批判は、沖縄縣民を忠君愛國の念に乏しいとしたことと、沖縄縣民をユダヤやインドの亡國の民と同一視したことにむけられている。奇しくも、講演当日の4月3日は、神武天皇祭であった。

河上肇には沖縄縣民を蔑視するつもりなどなかったであろう。沖縄が本土とは異なる県民性を持ち、琉球の苦難の歴史が傑出した人物を生み出す可能性があるという議論は、20世紀末の現在ならば沖縄縣民にも十分受け容れられるのではなからうか。それが当時の沖縄縣民の「劣等感と自嘲のからみ合った」<sup>22</sup>複雑な意識のために、「舌禍事件」に発展させられてしまったのである。

では、実際に河上肇はどのような琉球觀を持っていたのであろうか。京都大学経済学部河上文庫には、この講演のために書き留めたと思われるノートが残っており、以下のように河上肇の琉球觀が述べられている。

## 「二、琉球ノ歴史関係ヨリ生ズル興味

尚真王ノ後百年ニシテ薩軍ノ為メ破ラルー爾来明治十二年ニ至ルマデ琉球ハ半死ノ王国タリ。三百年間半死ノ国家ノ下ニ生活シ而シテ三十年前ニ亡國ノ運命ニ遭遇セシ民族ノ心理状態如何。

### (一) △国家ハ弱イモノダト云フ思想

此ノ思想ハ恐ラク牢固トシテ拔ケザラン。然ルニ日本ノ国家主義ハ国家ニ最上ノ価値ヲ求メ、

<sup>20</sup> 「新時代來」『琉球新報』1911年4月5日。「□」部分は判読不能。以下同様。

<sup>21</sup> 「旅行家の本縣評」『琉球新報』1911年4月5日。

<sup>22</sup> 大田昌秀『新版 沖縄の民衆意識』新泉社、1995年、329頁。

国家ヲ永遠ノモノトシ、個人ハ只ダ国家ノ為メニ働ケト云フ主義ナリ。

△日本ノ国家主義ニ対スル余ノ見解ハ的中セリ。

新制第三学年用高等小学用修身書

「国家ハ永遠ニ互リテ独立ニ生存ス。個人ノ生存ハ一時ノモノニシテ国家ノ生存ニ比スレバ極メテ短ク、寧ロ其ノ一部ヲナスモノト謂フベシ」

ソノ批評

○国家永遠ナラズ

○人類モ永遠ナラズ、併シ人類ノ方マダ永遠ニシテ、国家ハ其ノ一部ナリ＝併シ

○日本国家ノミ永遠ニシテ日本民族ハ世界ノ他ノ人類ヲ凡て併吞スト云フコト根拠ナリ

○斯カル事ガ新植民地ノ人ノ信仰トナリ得ルヤ否ヤ。」<sup>23</sup>

後述するように、1911年2月に河上肇は「日本独特の国家主義」を発表し、国家に最高の価値をおく日本人の国民性を指摘した。一方、琉球王国は薩摩による支配の後、琉球処分によって「新植民地」として日本に組み入れられた。独立を完全に失ってから30余年経た琉球では、本土のように国家主義は信奉されていないと河上肇は予想していた。琉球を実地見聞した結果、「国家ハ弱イモノダト云フ思想」が確かに存在したのである。講演「新時代来る」の最後の部分は、琉球に存在する「国家ハ弱イモノダト云

フ思想」を言明し、現代琉球の本土とは異なる発展路線の存在を示唆したものといえよう。

### 三、『沖縄毎日新聞』の河上肇擁護

『沖縄毎日新聞』は、『琉球新報』が問題にした講演の最後の一節を紙面に掲載しなかったが、この講演に対する評価は『琉球新報』とは全く異なる<sup>24</sup>。『琉球新報』の「旅行家の本縣評」を、『沖縄毎日新聞』は4月8日二面のコラム「机上餘瀝」で「小主観にして小激怒」と反論した。同コラムで『沖縄毎日新聞』は、本土から長らく別れて歴史を歩んできた琉球人が他府県人と異なる文化や政治を有することを認めた。同紙は、琉球人が狭小な国家主義や忠君爱国思想などに拘泥せず、国家の真の理想であるべき世界平和の理想を達することによって、忠君爱国の本旨に従うものであると述べた。そして河上肇を「従来の沖縄観察者とその遷を異にして忌憚なき事を放言したるは却りて琉球人の簡性に光彩を投じたる点に於て心窃に嘉納する所也」<sup>25</sup>と評した。

4月8日、河上肇は、那覇の明倫堂において那覇青年有志会の招請により、「矛盾と調和」と題する講演を行った<sup>26</sup>。『琉球新報』は、河上肇の那覇における二回目の講演を「非國民精神の鼓吹者再び演壇に顯れんとす」<sup>27</sup>と予告し、聴くに値しない人物と一蹴した。一方『沖縄毎日新聞』は、この講話を4月9日から7回にわ

<sup>23</sup> 住谷一彦「沖縄舌禍事件」『日本の意識』岩波書店、1982年、32頁。

<sup>24</sup> もっとも、『沖縄毎日新聞』も4月6日に『琉球新報』同様に河上肇攻撃の文章を掲載したが、8日の「机上餘瀝」で反批判している。

<sup>25</sup> 「机上餘瀝」『沖縄毎日新聞』1911年4月8日。

<sup>26</sup> 一回目の講演が「舌禍事件」となってしまったため、河上肇は2週間の予定を1週間に切り上げて沖縄を退去せざるを得なかった。2回目の講演は、9日の午後1時からと予定されていたが、8日の午前10時に繰り上げられ、同日中に河上肇は沖縄を離れた。

<sup>27</sup> 『琉球新報』1911年4月8日。

たって連載した。「矛盾と調和」の内容は以下の通りである。

経済の理想は、経済界のあらゆるものを無にすることにあり。つまり人類にとっての必要物が十分に満たされ、水や空気のように無価値になることが理想なのである。ひいては「大矛盾中の大調和」の把持にこそ人生の真の意義がある。西洋流の個人主義と日本の国家主義は、相矛盾するようであるが実は調和する。日本国家を真に強くするためには個人を強くしなければならず、実の国家主義も個人を強くするところにある。強い個人とは、新事物、新思想その他あらゆる新しいものを取り入れる大度量のある大人物である。日本も、英国のような個人主義に立脚した国家主義を目指すべきであり、いわゆる愛国者が唱えるような国家主義は真の国家主義ではない。

河上肇は、この講話を次のように締めくくった。

「私は僅か数日の間に大なるインプレッションを得た、殊に青年諸君のことは一生私が忘れることは出来ない、余は本県を訪ひて斯の如き歓待を受け何等御恩を報ずることなく害を及ぼして帰るは甚だ遺憾のことであるが之れ不才の致す処で仕方がない。」<sup>28</sup>

「矛盾と調和」を連載することは、真の国家主義とはいかなるものであるかを主張し、『琉球新報』のような「いわゆる愛国者」を論難するということであった。

『沖縄毎日新聞』は、河上肇の講演を掲載し

ただけでなく、複数の論者によって河上肇を支持する記事、論説を陸続と発表した。「舌禍事件」の発生以前、河上肇の那覇における一回目の講演直前に発行された4月3日の『沖縄毎日新聞』の無署名の「机上餘瀝」では、前半で河上肇の人柄、容貌、業績を紹介し、後半で河上肇の影響が強く看取される以下のような人間論を述べている。

人間と他の生物との違いは、意識が明瞭に反省されることであり、人間には欲望によって動機を得てから行為に移るまでの間がある。ひいては、人間は「本能生活機械生活」を超越し、複雑な意識の分化作用を起こしていることである。真に人間であるということは、道德、倫理、教育、政治、哲学、宗教及び芸術を伴う高尚美的の生活をするのである。沖縄県下の有力者で、このような高尚美的の生活をなし得るものがあるだろうか。

この人間の欲望と行為に関する論は、河上肇の『人類原始ノ生活』(1909年)にあらわれている。唯物論ではとらえられない人間の精神活動の範疇があるという考え方は、河上肇の生涯に一貫している。従って、この「机上餘瀝」の筆者も、河上肇の著作を読み、河上肇が沖縄に上陸してから、同コラムを執筆するまでの2日間に河上肇と接触があったことが推測される。

「矛盾と調和」の第一回連載を掲載した4月9日、一新人の署名記事「河上先生を送る」では、河上肇が「愚陋頑迷な一部少数縣民の不徹底的誤解に迷惑を感じつゝ、猶猶憐れみの念禁じ難くして去られた」<sup>29</sup>と、河上肇に共感を寄せている。11日には、翠<sup>30</sup>の署名コラム「机上餘

<sup>28</sup> 「矛盾と調和」『沖縄毎日新聞』1911年4月9-19日(『河上肇全集』5所収)、484-492頁。

<sup>29</sup> 「河上先生を送る」『沖縄毎日新聞』1911年4月9日。

<sup>30</sup> 比屋根照夫によると、「翠」、「翠香」とは、翠香山城長馨のことである。(比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』三一書房、1981年、110頁。)

瀝」が、「矛盾と調和」の本意を解説し、「一箇の腕白者たる彼□千山萬水樓主人を容ること能はざり□沖縄の小天地に生れたりしを今更後悔せざるを得ざる也」<sup>31</sup>と述べた。14日の無署名の「机上餘瀝」では、河上肇の名を挙げてはいないが、「新時代来る」及び「矛盾と調和」の論旨をさらに強調して宣揚し、琉球人に当てはめて次のように述べた。

個人主義が強まれば国家主義を超越して、人類全体が一つと把握されるようになるであろう。琉球人は、狭小な国家主義など超越するのに格好の位置におり、その使命を認識しうる者である。「琉球人亡びて日本人根本の箇性に歸一し、斯くて日本人亡びなば日本人の理想は調和統一して其處に夫れ斯の世界の人たらむことを看よ!!!」<sup>32</sup>

『沖縄毎日新聞』の河上肇擁護はまだ続く。17日の翠香の署名コラム「机上餘瀝」は、やはり河上肇の名は挙げずに、「矛盾と調和」の論理を解説した。

「矛盾は調和の行程也。調和は目的也。故に調和は最後の理想にして矛盾は最初的手段たり。個人主義は國家主義の行程也。故に國家主義は國家最後の理想にして個人主義は最初の方便たり。」<sup>33</sup>

このような理想の実現を目指すためには、理想を想像する感覚が必要であると説いている。なお、このコラムには、「經濟學の原理は欲望の

本質より出發せり」との一節がある。これは、河上肇の『経済学上之根本観念』（自费出版、1905年）や『経済学原論 上巻』（有斐閣書房、1905年）に看取される経済学観である。河上肇の琉球訪問に近い時期のものとしては、論文「經濟行為ノ観念」（『国民経済雑誌』8巻3号、1910年3月）<sup>34</sup>と論文「經濟行為ノ本質ヲ論ジテ其ノ賤視セラル、所以ニ及ブ」（『国家学会雑誌』24巻6号、1910年6月）<sup>35</sup>が、同じ観点から書かれている。つまり、このコラムの筆者翠香は、これらの河上肇の著作を読んだか、河上肇から経済学の根本観念について直接話を聞いていた可能性が強い。

『沖縄毎日新聞』の河上肇への傾倒は強く、河上肇の論文「日本独特の国家主義」を4月15日から13回にわたって一面トップに連載した<sup>36</sup>。それは以下のような内容であった。

日本民族の最大の特徴はその国家主義であり、国家は目的であり個人は手段となる。西洋で、個人が目的となり国家が手段になるのとは、正反対である。西洋では個人の権利は自己の目的のために存在する天賦のものであるが、日本では個人の権利は国家のために存在し国家から与えられるものである。日本にあっては個々人が独立の人格を有するとの観念に乏しく、むしろ一人一人は国格を代表すると考えられている。つまり、日本人一人一人が国家の機関なのである。西洋においては高貴な人物とは偉大な人格を有する人物のことであるが、日本では高貴な人物とはより多く国格を代表する人物であり、

<sup>31</sup> 「机上餘瀝」『沖縄毎日新聞』1911年4月11日。

<sup>32</sup> 「机上餘瀝」『沖縄毎日新聞』1911年4月14日。

<sup>33</sup> 「机上餘瀝」『沖縄毎日新聞』1911年4月17日。

<sup>34</sup> 『河上肇全集』5所収。

<sup>35</sup> 『河上肇全集』5所収。

<sup>36</sup> 同年4月30日の河上肇の書簡によると、これは『中央公論』からの無断転載であった。（『河上肇全集』24、347頁。）



その最高に位置するのが天皇である。つまり、日本が西洋と異なる点は、日本は神国であり国家が即ち神であるとの信仰があることである。土地資本の公有や産業の公営などについては、国家主義と社会主義が一見似ているので、社会主義も日本の国情に合うもののように思われる。しかし、国家主義と社会主義では根本的な性質が違う。国家主義と違って社会主義は、日本にはない個人主義に立脚し、各個人の利益のために主張される。日本では社会主義排斥の思潮が強いが、これは社会主義そのものというよりもその立脚する個人主義を排斥しているのである。西洋と日本では根本的な精神が違うのであるから、西洋流の社会主義のみならず、社会政策、立憲政治、政党政治も日本においては根付かないとさえいえる。言論の自由に関していえば、日本も西洋もどちらの方が自由であるとは簡単にはいえない。日本も西洋も宗教に関しては言論の自由がない。西洋はキリスト教、日本は国家至上主義がその宗教の内容である。西洋においてキリスト教を批判するのが禁物であるのと同様に、日本においては国家至上主義を批判するのが禁物なのである。

「思ふに、此の国家主義は吾が日本国の精華なり。……個人と個人と比較せば、吾等日本人は、富力に於いて知識に於いて将た体力に於いて、到底西洋人の敵たるを得ざるものなれども、その合して日本国を成すや、かの国家主義の精神の爲めに能く一大強国を実現し出す。

故に吾人は今後<sup>ニ</sup>に於ける此の国家主義の健全なる発展<sup>ヲ</sup>を熱望して已まざる者なり。乍併、吾

人は日本民族の特徴たる此の国家主義に無用有害の媚を呈せんとする一切の論説、運動、政策乃至制度に反対す。」<sup>87)</sup>

以上のように、河上肇の国家主義に対する態度は、西洋に対抗するには国家主義が必要であるが、無用に国家主義を宣揚するのは有害であるというものである。『沖縄毎日新聞』は、この論文を掲載することにより、河上肇が「非国民精神の鼓吹者」ではないということと、真の国家主義とは何かということを読者に訴えた。

『沖縄毎日新聞』における一連の河上肇擁護の記事のうち、最も重要なものは4月19日から2回連載された木水生の署名のある論文「京大助教授河上肇氏と本縣教育界」である。これは次のような主張をしている。

新思想というものは、旧思想に対して「何故<sup>ホウイ</sup>」と問いかけ、一定の理論によって、事実を解釈していくものである。教育界にある人間は、新思想によって子弟を感化していかなければならない。それにもかかわらず、新思想の紹介者河上肇の講演に対して、その本旨を理解しようとせず、余談の末節のみを取り上げて排撃しているのは軽佻である。河上肇の講演「新時代来る」の結論は、社会の各方面に対する改良を加え新時代に応ずることの出来る「新人」が興るべきである、ということである。この結論は反論の余地のないものであり、沖縄県<sup>ノ</sup>の教育界は、「新時代」と「新人」について河上肇によって智識を得たことを感謝すべきである。<sup>88)</sup>

翠香による4月21日の「机上餘瀝」は、木水生の論文を「河上氏を斯の如く徹底して、然か

<sup>87)</sup> 「日本独特の国家主義」(初出『中央公論』1911年2月)『経済と人生』実業之日本社、1911年12月(『河上肇全集』6)、134-135頁。

<sup>88)</sup> 「京大助教授河上肇氏と本縣教育界」『沖縄毎日新聞』1911年4月19-20日。

も河上氏以上の新見識を閃き在る」<sup>39</sup>と、強く支持した。

これら『沖繩毎日新聞』の記事、コラム、論説は、河上肇の単なる擁護の範疇を越え、河上肇の教示を得て沖縄の思想界、教育界を啓蒙していこうとする意図が看取される。比屋根照夫によると、「京大助教授河上肇氏と本縣教育界」の筆者は伊波普猷であり<sup>40</sup>、河上肇擁護を行った『沖繩毎日新聞』の中心人物は普猷の弟伊波月城であった<sup>41</sup>。

『琉球新報』と『沖繩毎日新聞』の、河上肇の講演に対する対応の違いは、両者の発刊姿勢の差に由来する。『琉球新報』は、1893年創刊の沖縄で最初の新聞である。『琉球新報』を主催したグループは、首里の旧支配階級の青年派であった。このグループは、廃藩置県以後本土からの外来者の手に移った沖縄の支配権力を、奪い返す目的を持って『琉球新報』を創刊したのである<sup>42</sup>。『琉球新報』は、創刊の趣旨の一つに沖縄に「国民的同化を計る」ことを明確に掲げていた<sup>43</sup>。ところが、沖縄の支配権奪還は、あくまでも旧支配層にとっての問題であった。『琉球新報』の同人グループにとっては、一般沖縄人を旧態依然たる意識に閉じ込めておいた方が都合がよかったのであると、大田昌秀は指摘している<sup>44</sup>。『琉球新報』は、1900年頃の謝花昇を中心とする民権運動にも妨害を行ってい

た<sup>45</sup>。

一方、1908年創刊の『沖繩毎日新聞』は、那覇や郡部の民衆の機関紙としての性格を備えていた。首里の旧支配者層の利益を代表する『琉球新報』に対し、『沖繩毎日新聞』は郡部及び那覇の利益を代弁する機関であった<sup>46</sup>。河上肇の講演以外の問題でも両者は抗争を続けており、その背後には首里の旧支配層と那覇の新興勢力の対立があった<sup>47</sup>。

本土との同化を強く主張しつつ沖縄の民衆の意識を旧態依然とした状態に押しとどめようとする傾向のあった『琉球新報』は、河上肇の講演の新しさを全く拒否し、琉球を異端視したことを攻撃した。新興勢力や民衆を啓蒙しようとする意図のあった『沖繩毎日新聞』は、河上肇の講演の真意を受容し、真の国家主義とは何か、個人と国家、地域と世界の関係は如何にあるべきかを沖縄人に向かって説いた。河上肇に対する両者の対応の違いは、このようにまとめられる。しかし、『沖繩毎日新聞』の論調は、沖縄の世論の支持を得るまでには至らなかった<sup>48</sup>。

#### 四. むすび

河上肇と沖縄とのかかわりのうち、最も特筆されるものは沖縄学の創始者伊波普猷との交流であろう。両者の交友について伊波普猷は次のように述べている。

39 「机上餘瀝」『沖繩毎日新聞』1911年4月21日。

40 比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』三一書房、1981年、111頁。

41 前掲書、82-84頁。

42 大田昌秀『新版沖縄の民衆意識』新泉社、1996年、92-99頁。なお同書には、中国崇拜と琉球王国の復活を志向する「黒党」「頑固党」と、本土との同化を主張する「開花党」との思想的対立についても述べられている。

43 大田昌秀『新版沖縄の民衆意識』新泉社、1996年、101頁。

44 前掲書、154頁。

45 前掲書、154頁。

46 前掲書、213頁。

47 前掲書、246頁。那覇と首里の対立の問題については、同書第五章の2「那覇対首里」に詳しい。なお、『琉球新報』と『沖繩毎日新聞』以外に、『沖繩新聞』が河上肇訪問当時の沖縄で発行されていた。

48 新城俊昭『高等学校琉球・沖縄史』1997年、177頁。

「河上肇博士との交りは明治四十四年五月〔引用者注一四月の誤り〕、博士が旧慣土地制度たる地割法の調査のため沖縄に来られた時に始まる。当時私は県立図書館創設のことに従ってゐたが、私の専門の琉球研究が予ねて博士の研究から幾多の示唆を受けるものがあつたので、博士の那覇滞在中朝夕相接し、相談するの歡びを得、又博士の調査にも幾分の便宜を提供することが出来た。爾来、京都と那覇の書信交換は断絶したが、私が東京に転住して数年の後、昭和十八年嘗て博士の跋文を頂いた旧著『古琉球』の再版が再び旧交を温める機縁となり、同年の暮には京都に博士を訪ね、十幾年振りに親しく相逢ふの楽しみを得た。」<sup>49</sup>

河上肇の琉球訪問以前に、伊波普猷は既に河上肇の著作に接していた。河上肇の琉球調査を伊波普猷が手引きした後、伊波普猷は自著『古琉球』(郷土研究社、1911年)の跋を河上肇に求めた。その後二人の関係は断絶したが、1943年2月、伊波普猷が『古琉球』の改訂版出版にあたり、河上肇の序文を削除したことの承諾を書信で河上肇に求めたと思われる<sup>50</sup>。このことをきっかけに32年ぶりに二人の交際が復活した。『河上肇全集』所収の書簡をたどっていくと、二人の交際は1945年まで続き、書籍や食物の交換を行っていたことがわかる。河上肇から伊波普猷への最後となった、1945年6月16日の手紙では、伊波普猷の東京の自宅への空襲被害と沖縄戦の惨状を見舞っている<sup>51</sup>。

河上肇から伊波普猷への学的影响については、

住谷一彦、比屋根照夫らの研究がある。住谷一彦は、河上肇から伊波普猷の沖縄学への影響を次のように分析している。

「国家という政治権力形象の形成過程を血縁的、宗教的の両面からアプローチする方法、国家形成に先行する時代を祭政一致の家族的団体のそれとしてとらえる視点、祖先崇拜の封鎖的家族宗教のレベルから種族神、さらに広域を支配する国家神へと上向していくという神觀念の理解の仕方、さらに国家の本質を発生的に征服王朝に求める視角、これらはすべて伊波の深く共鳴するところであつたと思われます。『古琉球の政治』は、確かにこうした認識の枠組みでもって構成されているからです。」<sup>52</sup>

伊波普猷は、河上肇の歴史認識における問題意識に共鳴していた。河上肇の歴史認識とは、祭政一致を国家の起源において重視することである。伊波普猷が描き出した琉球の歴史は、その視角において河上肇の描く日本の歴史に酷似していた。河上肇の歴史認識を琉球に照射して著された『古琉球の政治』は、「この小冊子をわが尊敬する河上博士にさゝぐ」<sup>53</sup>という献辞を附して公刊された。また、伊波普猷は、河上肇の『貧乏物語』に深く共鳴しいち早く沖縄に紹介していた。伊波の河上肇への論文の関心は持続し、『社会問題研究』を通じてマルクスの唯物史観に対する認識を深めていたとも考えられる<sup>54</sup>。

高良倉吉の指摘によれば、河上肇が日本にお

<sup>49</sup> 「河上博士書簡集〔前文〕」(初出『民主評論』四月号、1946年)『伊波普猷全集』第十巻、186頁。

<sup>50</sup> 河上肇の伊波普猷宛書簡、1943年2月15日、『河上肇全集』27、294頁。

<sup>51</sup> 河上肇の伊波普猷宛書簡、1945年6月16日、『河上肇全集』28、435頁。

<sup>52</sup> 住谷一彦「『日本国家主義』と『沖縄学』」『日本の思想』岩波書店、1982年、65-67頁。

<sup>53</sup> 『古琉球の政治』(『伊波普猷全集』第一巻所収)420頁。

<sup>54</sup> 住谷一彦「『海上の道』南漸と北進」『日本の意識』岩波書店、1982年、101頁。

ける琉球の特異性をはっきりと主張したのに対し、「河上肇舌禍事件」の時点では、伊波普猷は沖縄の特異性について言及することを避けた。その後長らく沖縄の独自性の探究は不問に付され、むしろ「日琉同祖論」が沖縄研究の主流を占めた。<sup>59</sup>

河上肇の沖縄に対する影響として特筆すべきことの第二点は、『沖縄毎日新聞』の論客に与えた影響である。『沖縄毎日新聞』は、河上肇の講演のうち、単に沖縄人の独自性を指摘した部分のみを擁護したのではない。河上肇が当時経済史を見る基本視角としていた唯物史観、科学の進歩によって経済が発展し新思想が現れるという考え方を、彼らは受容していた。「舌禍事件」後の一連の論説の基底にあるのは、現代が科学の進歩によってもたらされた「新時代」であり、新思想が出現すべき時であるという認識である。さらに彼らは、「日本独特の国家主義」及び「矛盾と調和」に現れた個人と国家の関係を、沖縄という地域と世界との関係に敷衍した。すなわち、沖縄人こそは、本土と異質であるが故に狭隘な国家主義から自由で、世界平和の理想に達しようとするにふさわしいと主張した。

伊波普猷の『古琉球』への跋文の中で河上肇は、「既に舌禍を蒙る、たとひ思ふ所ありと雖も、豈に復た重ねて筆禍を買ふに耐ふべけんや。而かも若し纔に一語を許されたならば、余は敢て言はんとす。真理は真理なるが故に万能なり。自由人格者の自由団結によりて、真に四海同胞の実を挙ぐる事、豈に読書人の空想とのみ為すべけんや」<sup>60</sup>と述べた。「四海同胞の実を挙ぐる」とは、「日本独特の国家主義」などには

現れていない新しい主張である。これは、前述した『沖縄毎日新聞』1911年4月14日の「机上餘瀝」中の「世界の人たらむことを看よ!!」などの主張と重なる。河上肇と『沖縄毎日新聞』は、相互に影響していたのである。

#### <参考文献>

- 新城俊昭『高等学校 琉球・沖縄史』。  
『伊波普猷全集』第一巻、第十巻、平凡社、1974-1976年。  
大田昌秀『沖縄の民衆意識』新泉社、1995年。  
『沖縄毎日新聞』（マイクロフィルム）。  
『河上肇全集』岩波書店、1982-1986年。  
住谷一彦『河上肇研究』未来社、1992年。  
住谷一彦『日本の意識』岩波書店、1982年。  
高良倉吉「河上肇と沖縄地割制研究」『河上肇社会問題研究復刻版第6巻月報』、1975年。  
高良倉吉「沖縄近代史のなかの河上肇」『河上肇全集月報』9、1982年。  
高良倉吉『琉球王国』岩波新書、1993年。  
玉野井芳郎「沖縄と河上肇」『河上肇全集月報』17、1983年。  
比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』三一書房、1981年。  
森田俊男『個性としての地域・沖縄』汐文社、1988年。  
『琉球新報』（マイクロフィルム）。

(博士後期課程第2年度生)

<sup>59</sup> 高良倉吉『琉球王国』岩波新書、1993年、27-33頁。

<sup>60</sup> 〔伊波普猷著「古琉球」の跋〕『河上肇全集』5、496頁。